

科学技術基本法が改訂され、第 6 期科学技術・イノベーション基本計画の中で人文科学に期待する動きが強まっている。本講演では、人文学が科学・科学技術にどのように関わり得るかについて講演者の考えを述べ、さらに宗教学とは何か、宗教とは何かを科学との関係という観点から説明する。

続いて、「生きる意味」「価値創造」に対して宗教学が果たし得る 2 種の役割について論じる。第一の役割は、新たな「意味」「価値」を宗教というリソースから取り出すというものである。

「Cool Japan」的な発想で、新たな「意味」「価値」を日本・世界の宗教的伝統の中に見いだしていう可能性である。SDGs を初め、グローバルに推進する倫理的課題も、各地・人の宗教的伝統に結びつけることで浸透しやすくなるという考え方がある。ただし、よくある「人類の叡智に学ぶ」的アプローチには落とし穴もあり、それを指摘するのも宗教学の役割である。例えば、宗教は「生きる意味」を与えと思われがち・期待されがちだが、「死ぬ意味」も与える。宗教的知見や伝統を現代社会に役立たせようという人たちは、宗教の一部を切り取り、一方的に解釈する傾向がある。それは宗教の理解を歪めることにもなるが、そのような解釈が宗教（信者）側にフィードバックされれば、それが宗教の自己理解にも影響を与え、宗教自体の変容をもたらすこともある。

第二の役割は、人々の間の（宗教が絡む）価値観の異同を指摘し、それを踏まえた上での世界的な協働を可能にするというものである。例として、「AI が神になったら世界はどうなる？」論の受け止め方がいかに文化・人によって異なるかを知らなければ、いわゆるシンギュラリティについての議論も空回りしてしまう。「無宗教」を自認する人が多い日本国内にも信仰をもつ人は存在し、物事を異なる見方でとらえていることを意識するのも重要である。

いずれの役割においても、宗教学者は何らかの価値や意味を自ら提示するというよりも、特定の地域の人々の価値観や意思決定プロセスに宗教がどう関わっている調べ、それによって人々が自分たちの社会の望ましい姿と思うものを言語化して理解することを助け、他の地域の人々との対話を促進し、場合によっては自己を相対化するきっかけを作るということを通して、社会と科学技術政策に関わりうる。